

## 家庭内労働の再検討：結婚の質への感情労働の影響

——アメリカにおける中年期研究 (MIDUS) の日本版カップルデータにみる——

平 賀 明 子

### 目次

- I. 問題の所在
- II. 先行研究の概観
- III. 調査の概要
- IV. 結果
- V. 考察と今後の課題

### I. 問題の所在

女性の社会進出に伴い、仕事と家庭内労働のあいだにどのようなバランスをとることが個人の人生満足や幸福感にむすびつくかは、個人の問題であると同時に関係性の問題、そして社会的な問題にもなりつつある、と筆者は考える。個人の問題という点では、晩婚化にみられるように、結婚は必ずしも若い男女を惹きつける魅力あるものにはなっていない。にもかかわらず、いずれは結婚と考える未婚者が多いのも事実であり、その場合、配偶者選択のタイミングによるミスマッチは職業選択に有利な男性よりは不利な女性に、環境に順応しやすい若年期よりは順応が難しい中年期に影響を受けることが予想される。

関係性の問題という点では、仕事の領域に求められる他者と交渉する能力が、家庭内にも同様にその重要性が問われるようになっていく。近年にみられる離婚の増加は、単に相手が嫌いになったといった単純な理由だけでは説明できない。お互いの満足や幸福感に対

して話し合いという土俵に立てるか否かが「結婚の継続」を左右するといっても過言ではない。近年、出生率が他の諸国に比べて低い我が国において、なにが妻の出生意欲を高めるのかに焦点をあてた研究 (山口, 2006) では、妻が結婚に満足していること、そして妻の結婚満足度に影響する決定要因として夫と共に過ごす休日のくつろぎ、家事・育児、趣味・娯楽等といった「共有主要生活活動数」を挙げている。このことは、結婚と家族内の親密で長続きする対人関係を求める「伴侶性」(ブラット, 1967=1978) の役割が重要になっていることを示唆している。

社会的な問題という点では、家庭内で果たしてきた家事や育児、さらには年老いた親の介護等がこれまで以上に負荷のかかる労働 (あるいはかかわり、といってもよい) として人々に認識されるようになってきた。それらはいずれも昔と比べ長期的という特徴がある。にもかかわらず、これらの労働は「みえない労働」(Daniels, 1987) として位置づけられ、社会的な評価を受けることが少ない。

近年にみられる競争原理に基づくキャリア志向の流れ、あるいは若さや美に価値をおくマスメディアの影響は、目に見えない労働の価値を相対的に貶めている。その結果、家庭内労働に従事する専業主婦たちの誇りや自信を喪失させている。というのも、「みえない労働」を評価する社会の装置がますます見えにくいものになっているからである。評価さ

---

キーワード：結婚満足度、感情労働、中年期カップル

れない労働に対する不満のはけ口はどこへ向かうのだろうか。家庭内労働である家事・育児を夫と妻のあいだで平等に分担されることが不満の解決に繋がるのだろうか。

しかし、家事分担に関する Stevens ら (Stevens, Kiger & Riley, 2001) の研究によると、家事の平等化をめざす女性はそのような夫と結婚し、伝統的な性別分業に価値を置く女性は、夫に平等な家事分担を求めない傾向がある、と指摘する。

本稿では、家庭内労働として捉えられてきた家事と育児に対し、それらの労働とは異なる感情労働 (emotion work) に新たな光を投げかける。感情労働とはホックシールド (1983=2000) がキャリア・アテンダントの労働に焦点をあて、それを emotion work として位置づけたことに端を発している。家族の定義に関する歴史的背景 (森岡, 2005) に着目すると、家族は福祉追求の集団から感情的かかわりあい結ばれた幸福追求の集団へと文面を変えている。それは家族が家事や育児という道具的役割に支えられているだけでなく、成員間の情緒的・感情的役割にも支えられた、「他者の感情的幸福感の高揚と感情的サポートの供給を含む」(ホックシールド, 1983=2000) 集団でもある、ことを示唆している。

## II. 先行研究の概観

家庭内で行われる家事および育児を労働と捉え、なかでも家事は主婦にとって労働と呼ぶにふさわしい、「単調／くりかえしが多いこと／たいくつ」なものであることを気づかせたのはアン・オークレー (1974=1980) である。しかし、彼女は主婦が行う労働のマイナス面だけに焦点をあてたのではなかった。主婦であること一番いいことは、「自分自身があるじであること」というように、プラス面があることも指摘している。それから四

半世紀が経った現在、家事および育児に対する認識はどの程度変わったのだろうか。筆者は家事のみならず育児さえもマイナス面の認識が広がっているのではないかと考えている。その理由は、業績原理に基づくキャリア志向の流れ、若さや美に価値をおくマスメディアの影響によって家庭内労働の相対的価値が低くなっていると思われるからである。

1950年代半ばから1970年代前半まで続いた高度経済成長は家族の個人化を促した。家族は少人数化 (森岡, 1997) し、人々はかかわる煩わしさを避け (あるいは避けられて)、今では年老いても夫婦だけの食卓、一人だけの食卓もめずらしいものではなくなっている。だからといって過去の拡大家族を現在に呼び戻したいわけではない。同一世帯内で夫 (息子) を挟んで嫁と姑が緊張・葛藤するのは決して望ましいことではないだろう。問題は、かかわる煩わしさを避けることから派生すると思われる「耐性のなさ」、言い換えれば、交渉力の欠如が家族の内部にも広がっているのではないかとと思われる点にある。

たとえば、家庭環境が異なる夫と妻がお互いに軋轢を避けるために、あるいは嫁と姑のような他人同士が煩わしいけれども「よりよいかかわり」を求め、少なくとも縁を切らないために支払ってきた労力は emotion work と呼ぶにふさわしいのではないか。エリクソン (1993:2005) は家庭内労働の概念に、家事と育児と同様、感情労働を含め、この労働に対する認識の重要性を指摘した。エリクソン (1993) の知見では、夫の家事の協力は妻の結婚幸福感にプラスの影響を与えるが、しかしそれ以上に、夫の感情労働の遂行は妻の結婚幸福感にプラスに影響することを明らかにした<sup>(1)</sup>。しかしながら、この研究の限界は対象がカップルではなく既婚の女性に限定されていたため、妻の感情労働が夫の結婚幸福感にどのような影響があるのかを検討することができなかった。

この限界を埋めるためには対象者を夫婦の組み合わせで検討する必要がある。本稿で扱うデータは夫婦組み合わせであるため、先の知見 (Erickson, 1993) に加えて、夫には妻の感情労働と夫自身の感情労働を投入し、妻には夫の感情労働と妻自身の感情労働を投入して結婚満足度の構成要素を検討することが可能になった。そこで本稿では以下のような仮説をたて、検討することにした。

#### 仮説 1

先行研究 (Erickson, 1993) と一致して、夫の感情労働の遂行は妻の結婚満足度にポジティブに影響し、また同様に、妻の感情労働の遂行は夫の結婚満足度にポジティブに影響するだろう。

#### 仮説 2

家庭内労働の感情労働の遂行の側面は、家事か子育て評価のどちらかの遂行よりも結婚満足度にポジティブに影響があるだろう。

### Ⅲ. 調査の概要

#### 3-1. 質問紙

質問紙は1995年から1996年にかけてマッカーサー財団によって全米を対象に行われたサクセスフルエイジング研究 (MIDUS) の日本版「健康と社会的ネットワーク生活の質についての調査」である (日本の研究代表者：唐澤真弓, 2001)。この調査は日米文化比較を目的として設定され、日本人の主観的幸福感を詳細に検討するため、日本の項目を新たに加え日本版 (MIDJA) 質問紙として作成された。本稿で扱う調査データは、個人の結婚満足度の日米比較を、中年期カップルにおける夫と妻の結婚満足度の問題から整理・分析したものである。なぜ中年期に焦点をあてるかについては、平賀 (2007) に詳しく述べている<sup>(2)</sup>。

本稿では結婚満足度を検討するにあたり、2つの目的を設定する。一つは、家事・育児

に感情労働を加え、夫婦間の性差を調べるためにT検定を行い、その後、夫婦別にすべての変数間の相関分析を行う。他の一つは、結婚満足度の構成要素を検討するために家事労働、年齢、教育年数、仕事への投入、夫と妻の収入を加え、夫には妻の感情労働および夫自身の感情労働を、妻には夫の感情労働および妻自身の感情労働を投入する階層的回帰分析を行う。最後に、子どものいるカップルのみに焦点をあて、先の変数に子育て評価を加え、結婚満足度に対する感情労働の影響を探索的に調べ検討する。

#### 3-2. 調査対象と時期

調査 1 対象は筆者の知人・友人およびその紹介者、筆者の所属する大学・短大生を通じて得た25歳～65歳の夫婦94カップルであり、時期は2003年7月末～8月中旬である。

調査 2 対象は主婦向けセミナー参加者、看護医療従事者、短大生を通じて得た25歳～65歳の夫婦61カップルであり、時期は2005年6月～8月中旬である。なお、夫婦間の独立を保つため回答後すぐ封のできる別々の封筒に調査用紙を入れ、2通1組として配布し回収した。

回答者の基本属性である年齢の平均は夫46.0歳、妻44.2歳である。教育年数は高校卒では夫35.7%、妻39.9%とほぼ同数だったが、短大・専門学校卒では妻43.1%に対し夫29.9%、大学卒以上では妻13.7%に対し夫31.8%と学歴に性差がみられた。個人の年収では99万以下の妻は49.0%、夫13.5%、100万～299万円では妻12.1%、夫7.8%、300万～599万円では妻21.5%、夫39.1%、600万円以上では妻17.4%、夫39.7%と収入が多くなるにつれ夫の占める割合が高くなり、収入による性差が顕著であった。

#### 3-3. 結婚満足度の測定

結婚の質の認識に関連する変数として結婚

満足度と主観的幸福感について調べた。相関分析ではこれら2つの従属変数を入れ、すべての変数間の関連をみているが、重回帰分析では結婚満足感のみに焦点をあてた。主観的幸福感については平賀(2007)を参照してほしい。質問項目は、最近の結婚生活やパートナーとの関係を問うもので、「悪い」1点～「良い」10点までの10段階評価1項目からなっている。夫の平均は7.49、妻は7.44と夫婦間に差異はみられなかった。

### 3-4. 家庭内労働

独立変数として家庭内労働をとりあげる。家庭内労働は、家事労働、子育て評価、感情労働1、感情労働2の4つの変数から構成されている。

1) 家事労働については、さまざまな家事の遂行(たとえば、料理、買い物、選択、掃除、庭仕事、修理、請求書の支払)を一般的に回答者が多く行うか、それとも配偶者が多く行うか、それとも平等に行うかと問うている。「自分の方がとても多い」1点～「配偶者の方がとても多い」7点の7段階評価1項目である(逆転項目)。この項目は点が高いほど、自分の方が家事を多く行っていることになる。T検定の結果、予想したように妻は自分が家事を多く行っていると評価し(T(300)=-10.99,  $p<.001$ )、夫からみた妻の家事評価についても同様の結果となった。

2) 子育て評価は、子どものいる対象者へのみ次のような質問項目で尋ねている。①最近、あなたと子どもとの関係の程度はどのくらいか判断してください、②どのくらい子どもとの関係について考えたり、なにか努力していますか、③子どもとの関係をどのくらい自分でコントロールしていますかと問う。「とても悪い」1点～「とてもよい」10点の10段階評価で、点が高いほど肯定的評価を示す。内的整合性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は.73である。T検定の結果、家事労働と同

様、子育て評価も妻の評価は夫よりも有意に高かった(T(272)=-2.84,  $p<.01$ )。子育て評価については、夫は妻よりも低いとはいえ、家事に比べて自分の子育てをかなり高く見積もっている。この結果は、先行研究(Erickson, 1993:2005)において指摘されるように、子育てに対するかかわりは男性にとっても重要なものという認識を示唆している。

感情労働は配偶者から受けるサポートを便宜上感情労働1とし、回答者から配偶者にサポートを提供する場合を感情労働2とした。

3) 感情労働1は、①あなたの配偶者は、どのくらいあなたの面倒をみてくれますか、②あなたの考えや気持ちを尊重してくれますか、③あなたを正しく理解してくれますか、④あなたが深刻な問題を抱えているとき、配偶者にどのくらい頼ることができますか、⑤悩みがあるとき、どのくらい打ち明けることができますか、⑥配偶者と一緒にいるとき、どのくらいリラックスできますか、の6項目からなっている(逆転項目)。点が高いほど、感情労働を多く行っていることになる。「よくある」1点～「ない」4点の4段階評価で、内的整合性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は.92(夫  $\alpha=.90$ :妻  $\alpha=.93$ )である。T検定の結果、夫の評価は妻よりもわずかに高かった(T(293)=1.97,  $p<.05$ )。つまり、夫は妻からより多くのサポートを受けていると認識しているようである。

4) 同じ質問項目を配偶者に対して回答者がどの程度サポートを提供しているかを問う感情労働2では、クロンバックの $\alpha$ 係数は.89(夫  $\alpha=.88$ :妻  $\alpha=.90$ )であり、T検定の結果、夫と妻のあいだに統計的に有意な差はみられなかった(T(306)=-0.71, ns)。これら4つの家庭内労働に関する夫と妻の平均は図1に示した。

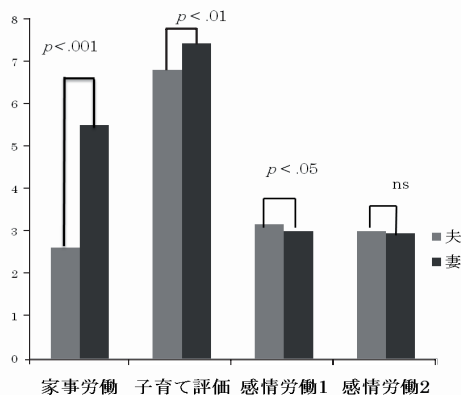


図1 夫と妻の家庭内労働（平均値）

### 3-5. 主観的幸福感

主観的幸福感とは、Ryff (1989) の主観的幸福感（以下、SWB と略す）と同様、肯定的感情と否定的感情が各々6項目、人生満足が1項目から構成される合成尺度である。主観的幸福感の高さを測る指標は、肯定的感情が高く、否定的感情が低く、人生満足感が高いことによって示される。両感情は回答者に、「この1ヶ月間で、あなたは以下に示す気分をどの程度経験しましたか？」と尋ね、「いつも感じる」を1点～「全く感じない」を5点とした5段階評価で求めている。肯定的感情は「楽しい、機嫌がいい、とても幸せ、穏やか・安らか、満足、満たされている」（すべて逆転項目）、否定的感情は「悲しくて何も慰めるものがない、神経質、不安・落ち着かない、絶望、何事もおっくうに感じる、自分に価値がない」からなっている。内的整合性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は肯定的感情.93、否定的感情.87である。人生満足は、最近あなたの人生は全般的にどのくらいか判断してくださいと問うもので、「とても悪い」1点～「とても良い」5点の5段階評価で求めている。主観的幸福感の夫の平均は4.76、妻の平均は4.77と夫婦間に差はほとんどみられない。

### 3-6. 仕事への投入

仕事への投入を本稿で扱う理由は、先行研究（平賀，2007）でも述べたように、中年期が他の年代に比べて性差が現れやすい年代ではないかと考えるからである。質問項目は、①最近、あなたは自分の仕事の状況をどの程度コントロールしていますか、②自分の仕事についてどの程度考えたり、なにか努力していますかと尋ね、「まったくしていない」1点～「とてもしている」10点の10段階評価で求めている。夫の平均は7.49、妻の平均は7.44と性差はほとんどみられない。

### 3-7. 社会人口統制変数

社会人口統制変数として、年齢、教育年数、個人の収入を夫と妻別々に投入した。この結果については、先の調査対象者の基本属性で示したとおりである。

## IV. 結果

表1は、すべての変数間の相関の結果を示したものである（表1）。上段の妻でみると、妻の結婚満足度は家事労働とやや強いマイナスの関連を示し、配偶者の感情労働、妻自身の感情労働、主観的幸福感がプラスに強く相関している。妻の結婚満足度と家事労働とのあいだのマイナスの関連については、先行研究（Stevens, Kiger & Riley, 2001）を支持する結果となっている。

夫はどうだろうか。夫の結婚満足度は妻同様、配偶者の感情労働、夫自身の感情労働、主観的幸福感がプラスに強く関連したが、家事労働には無関連である。仕事への投入と子育て評価も強いプラスの関連を示し、夫と妻の共通性と差異性を明確に示す結果となった。共通性という点では性差に関係なく、配偶者から受ける感情的サポート、回答者本人が配偶者に与える感情的サポートの提供、回答者自身が主観的に幸福であると感ずることが結

表1 すべての変数の相関

n=155カップル

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 結婚満足度		-.26**	.44**	.56***	.64***	-.01	.12	.11	.17	.00	.02
2. 家事労働	.13		.00	-.13	-.05	-.04	-.22**	-.01	-.57***	.64***	.16
3. 配偶者の感情労働	.59***	.10		.51***	.28***	-.05	-.07	-.01	-.04	.06	.12
4. 回答者の感情労働	.69***	.11	.58***		.34***	.07	.05	-.02	.11	-.05	.22**
5. 主観的幸福感	.57***	.13	.36***	.53***		.10	.03	.20*	.03	.17*	.13
6. 年齢	.04	.07	-.10	-.03	.16		-.19*	-.05	-.09	-.14	-.17*
7. 教育年数	-.03	-.15	-.03	-.05	-.05	-.16		.08	.31***	-.10	.01
8. 仕事への投入	.28***	-.30***	.20*	.36***	.18*	-.12	.01		.13	-.08	.18*
9. 回答者の収入	-.00	-.63***	-.00	-.02	-.08	-.15	.24**	.26**		-.40***	-.14
10. 配偶者の収入	.13	.51***	.23**	.10	.09	-.09	-.13	-.21**	-.39***		.09
11. 子育て評価	.25**	.21*	.19*	.22**	.32***	-.11	.16	.18	-.08	.13	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

注1：相関の結果は上段妻，下段夫で表示した。

注2：2. 家事労働，8. 仕事への投入，11. 子育て評価は夫と妻それぞれの回答を示す。

婚満足度にプラスの影響を与えている。しかし、性差で異なる点は、家事労働は妻の結婚満足度を損ない、仕事への投入と子育て評価は夫の結婚満足度を高めていることである。

表2と表3では夫および妻の家事労働と社会人口統制変数、配偶者の感情労働、回答者自身の感情労働を投入した結婚満足度に関する階層的回帰分析の結果を示した。夫の場合、表2に示すようにステップ1では、仕事への投入と妻の収入が夫の結婚満足度にポジティブな効果を示し、なかでも仕事への投入の影響は強い。ステップ2において妻の感情労働を投入したところ、ステップ1の妻の収入の効果は消え、仕事への投入の効果は弱まり、妻の感情労働が夫の結婚満足度に強いポジティブな影響を示す変数として現れた。さらにステップ3において夫自身の感情労働を投入したところ、ステップ2の仕事への投入の効果が消え、妻の感情労働と夫自身の感情労働の2つが強いポジティブな影響を示す変数となった。またステップ1からステップ2、ステップ3とステップがあがるにつれて説明力が増え、感情労働は結婚満足度の重要な指標であ

る、というエリクソンの知見(1993)を支持する結果となった。

解釈として、夫は妻に収入があること、仕事に投入できることが結婚の満足を高めるが、その仕事への投入も妻から受ける感情的サポートと夫自身が妻に対してうまくいっていると主観的に理解していることによって可能であることを示唆している(表2)。

表2 夫の家事労働と社会人口統制変数、妻の感情労働、夫自身の感情労働を投入した結婚満足度の重回帰分析

	step 1	step 2	step 3
独立変数	$\beta$	$\beta$	$\beta$
夫の家事労働	.19	.17	.09
年齢	.03	.03	.01
教育年数	.02	.01	.01
仕事への投入	.41***	.25**	.05
夫自身の収入	.28	.21	.24
妻の収入	.55*	.08	.17
妻の感情労働		1.68***	.70***
夫自身の感情労働			2.18***
<b>R<sup>2</sup></b>	<b>.16**</b>	<b>.45***</b>	<b>.64***</b>
n=123	* $p < .05$	** $p < .01$	*** $p < .001$

一方、妻の場合、ステップ1では妻の結婚満足度の構成要素として夫の収入がやや強いポジティブな効果をもつが、妻の家事労働は強いネガティブな効果を示した。ステップ2において夫の感情労働を投入したところ、ステップ1の夫の収入の効果は弱まり、夫の感情労働がもっともポジティブな効果を示した。ステップ3ではさらに妻自身の感情労働を投入したところ、夫の感情労働は弱まり、妻自身の感情労働が強いポジティブな効果を示すようになった。また妻の家事労働は一貫してネガティブな効果をもち続けている（表3）。さらに妻の場合、夫のようにステップがあがっても説明力は増えず、感情労働以外に他の要因を考慮する必要があると思われた。

解釈として、妻は夫の収入が高く、家事労働の遂行が少なく、夫から受ける感情的サポートに加え、妻自身が夫に対してうまくいっていると主観的に理解していることが結婚満足度を高めることを示唆している。したがって、夫の感情労働は妻の結婚満足度にポジティブに影響し、同時に妻の感情労働は夫の結婚満足度にポジティブに影響する、という先述の仮説1が支持された。

しかし妻の場合、いくつかの点で夫とは異なる特性をもつことに注目したい。第一に、配偶者の収入が夫よりも妻の方で結婚満足度の構成要素として強い効果をもっている。第二に、感情労働は配偶者から受けるサポート（感情労働1）も、回答者自身が配偶者に提供するサポート（感情労働2）も結婚満足度の重要な構成要素ではあるが、その効果は夫の方が妻よりも強い。第三に、妻の家事労働は結婚満足度に一貫したネガティブな効果をもつが、夫にはあてはまらない。

つぎに表2と表3をもとに子どものいる対象者に焦点をあて、先に示した仮説2を検証した。表に示していないが、ステップ2では子育て評価を投入し、ステップ3において配偶者の感情労働を投入し、ステップ4では回

表3 妻の家事労働と社会人口統制変数、夫の感情労働、妻自身の感情労働を投入した結婚満足度の重回帰分析

	step 1	step 2	step 3
独立変数	$\beta$	$\beta$	$\beta$
妻の家事労働	-.45***	-.39**	-.37**
年齢	.03	.02	.01
教育年数	.06	.12	.09
仕事への投入	.10	.11	.15
妻自身の収入	.02	.03	-.03
夫の収入	.96**	.77*	.77*
夫の感情労働		1.53***	.92**
妻自身の感情労働			1.16***
<b>R<sup>2</sup></b>	<b>.13**</b>	<b>.31***</b>	<b>.38***</b>
n=129	* $p < .05$	** $p < .01$	*** $p < .001$

答者自身の感情労働を投入した。その結果、夫の場合、ステップ2において夫の子育て評価が弱いポジティブな効果を示したものの、ステップ3になるとこの効果が消えている。統計的に有意な変数の効果は表2と変わらず、説明力にも大きな変化はみられなかった。一方、妻の場合、妻の子育て評価はステップをつうじて統計的に有意な影響は示さず、また説明力も増えてはいない。

このことから、仮説2が支持された。つまり、感情労働は夫においても妻においても家事や子育てよりも強くポジティブな影響を示し、結婚満足度の重要な構成要素となっていた。

ところで、妻の家事労働はなぜ結婚満足度に一貫したネガティブな影響を示すのだろうか。結婚は一生しないわけではないが、さりとて早く結婚する理由がみつからないと結婚を先送りしてきた30台、40台の成人男女を考えるならば、この家事労働のネガティブな影響について再考する価値があるだろう。

先の述べたように、妻が行う家事労働は、「単調／くりかえしが多いこと／たいくつ」といったネガティブな側面と「自分自身があるじであること」というように、ポジティブ

な側面がある (アン・オークレー, 1974=1980)。近年のキャリア志向の流れ, あるいは若さや美に価値をおくマスメディアの影響によって, 家事のような地味で「目にみえない」労働は評価されにくい。さらに, 外食や出来合いの食事を手軽に購入できる「家事の外部化」の影響は, 家事を労働というよりは趣味的で手軽なもの, という間違っただけの認識を人々に与えやすい。こうした状況のなかで, 妻が行う家事労働の遂行は夫を含む他者から十分な評価を受けているとは言い難い。おそらく, 社会的な意味で妻の家事労働は評価が低く, その反映を受け個人的な意味で妻は自ら行う家事労働をネガティブなものとして受けとめてしまうのではないかと懸念される。

本稿の結果に結び付けて考えるならば, 妻にとって結婚満足度はなぜ夫よりも低いのか, 妻の家事労働をどうすればネガティブなものからポジティブなものに変換することが可能なのか, 妻の子育て評価はなぜ結婚満足度に関連しないのか等, 検討すべき課題として残されている。

#### IV. 考察と今後の課題

家族における家庭内労働の分配と結婚の質の認識のあいだによりよい理解を求めて, 本稿では, エリクソン (1993:2005) の研究に刺激を受け, 家庭内労働の概念を拡張し, 家事と育児同様, 感情労働を含めて検討を行った。エリクソン (1993) の分析データは既婚の妻であったが, 本研究の分析対象者が155の中年期カップルであったため, 妻だけでなく夫の認識された結婚満足度に関して, 回答者の家事と配偶者の感情労働, 回答者自身の感情労働の遂行の評価を使い, 夫と妻それぞれについて調べることができた。また子どものいる既婚カップルのサブサンプルでも, 夫と妻それぞれの子育てについて調べている。結果は (1) 配偶者の感情労働と回答者自身の感

情労働は家事か子育てのどちらかの遂行よりも配偶者の結婚満足度にもっとも強いポジティブな効果を示した。(2) 妻の家事の遂行はかれらの結婚満足度の感情に否定的に関連していた。(3) 感情的サポートの供給は家庭内労働の側面として概念化され測定に組み込まれうることを示唆している。

感情労働は先に述べたように, ホックシールド (1983=2000) がキャリア・アテンダントの労働に焦点をあて, 乗客の不愉快な要求に対し怒りを感じていても, 笑顔で対応することが職業として期待される労働を emotion work と呼んだ。この emotion work を家庭で遂行される家事や育児に加えて家庭内労働の再概念化を行ったのはエリクソン (1993:2005) である。エリクソン (1993) は妻の結婚幸福感とあわせて結婚燃えつき感の構成要素を検討し, 妻の結婚の質の認識について, 夫の感情労働の重要性を指摘した<sup>(3)</sup>。これらの知見は本研究においても支持された。

今後の課題として, カップル数が少ないので, 国レベルの代表的なサンプルとは言い難く, 一般化できないことである。とくに30台と40台のカップル数を増やすことは中年期研究の一般化を目指すうえで重要なことだと考えている。また, 日本における感情労働に関する研究 (岡原・山田・安川・石川, 2002) はあるものの, 家庭内労働に感情労働を含む文献はほとんど見出すことができなかった。たしかに感情労働は感情的サポートとほぼ同義と考えても間違いではないだろう。しかし, 筆者は家事や子育てを労働と捉えるように, 家族成員間 (他者も含む) の「感情的幸福感の高揚と感情的サポートの供給」(ホックシールド, 1983=2000) も労働と捉えることに賛意を示したい。なぜなら, そうした感情は「自然に」身に付くものでも得られるものでもなく, 結婚を継続しようとするものには等しく多大なエネルギーが求められる, と考えるからである。



さいごに、今回の分析では行わなかったが、結婚の質への認識に対し、結婚満足度を夫と妻で組み合わせ、グループ（たとえば、夫高い/妻高い、夫低い/妻低い、夫高い/妻低い、夫低い/妻高い）ごとに、その類似点と相違点について検討することも今後の課題である。

#### 【注】

- (1) Erickson (1993) は結婚幸福感と結婚燃えつき感をそれぞれ従属変数とした。幸福感は4項目、燃えつき感は12項目から構成されている (Erickson, 1993)。しかし本研究では結婚満足度（1項目）のみを従属変数としたので単純に比較はできない。今後項目を増やして比較可能なものにしたいと考えている。
- (2) 詳細については、平賀 (2007) を参照のこと。
- (3) Erickson (1993) の結婚燃えつき感に関する分析では、夫の感情労働の遂行は結婚燃えつき感に対してネガティブに影響している。この点で、結婚幸福感に対するポジティブな影響とは逆の効果を示し、解釈としては同じことがいえる。

#### 【文献】

- アーガイル・M/ヘンダーソン・M 著, 1992, 『人間関係のルールとスキル』北大路書房。
- Blood, R.O. 著 (1967) 『現代の結婚』-日米の比較- 田村健二監訳, 1978, 培風館。
- Daniels, A. K. 1987. "Invisible work." *Social problems*, 43, 403-415.
- Erickson, R. j. 1993. "Reconceptualizing family work : the effect of emotion work on perception of marital quality." *Journal of Marriage and the Family*, 55, 888-900.
- Erickson, R. j. 2005. "Why Emotion Work Matters: Sex, gender, and the Division of Household Labor." *Journal of Marriage and the Family*, 67,337-351.
- Hochschild, A. R. 1983. "The managed

Heart : Commercialization of human feeling." Berkeley : University of California Press. 石川 准・室伏亜季訳『管理される心』世界思想社, 2000.

平賀明子, 2007, 「中年期カップルにおける肯定的感情と否定的感情—アメリカにおける中年期研究 (MIDUS) の日本版データにみる—」『現代社会学研究』VOL.20, 94-113.

森岡清美, 2005, 『発展する家族社会学』, 有斐閣。

森岡清美・望月嵩共著, 1997, 『新しい家族社会学』四訂版, 培風館。

Oakley, A. 1974. "The sociology of housework." New York : Random House. 佐藤和枝・渡辺潤訳『家事の社会学』松籟社, 1980.

岡原正幸・山田昌弘・安川 一・石川 准『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代』, 世界思想社, 2002.

Ryff, C. D. 1989. "Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being." *Journal of Personality and Social Psychology* 57 : 1069-1081.

Stevens, D., Kiger , G., & Riley, P. J. 2001. "Working hard and hardly working : Domestic labor and marital satisfaction among dual-earner couples." *Journal of Marriage and the Family*, 63, 514-526.

山口一男 (2006) 「ワーク・ライフ・バランスと妻の結婚満足度 : 少子化対策の欠かせない視点 RIETI (独立行政法人経済産業研究所) [http://www.rieti.go.jp/jp/columns/a01\\_0198.html](http://www.rieti.go.jp/jp/columns/a01_0198.html)

竹内 啓監修, 1999, 『SAS によるデータ解析入門』[第2版], 東京大学出版会。

資料：「感情労働」項目に対する因子分析の結果（バリマックス回転後の因子負荷行列）

項目	F1	F2
(第一因子：感情労働 1)		
M10. あなたの配偶者は、どのくらいあなたの考えや気持ちを尊重してくれますか？	.83	.31
M 9. あなたの配偶者は、どのくらいあなたの面倒をみてくれますか？	.80	.18
M12. あなたが深刻な問題を抱えている時、あなたの配偶者にどのくらい頼ることができますか？	.79	.26
M11. あなたの配偶者は、どのくらいあなたを正しく理解してくれますか？	.78	.35
M14. あなたの配偶者と一緒にいる時、あなたはどのくらいリラックスできますか？	.74	.38
M13. あなたの悩みについて打ち明ける必要がある時、あなたの配偶者にどのくらい打ち明けることができますか？	.74	.38
(第二因子：感情労働 2)		
M17. あなたはどのくらい配偶者を正しく理解していますか？	.31	.80
M15. あなたはどのくらい配偶者の面倒をみますか？	.11	.77
M16. あなたはどのくらい配偶者の考えや気持ちを尊重しますか？	.36	.75
M19. 配偶者が悩みについて打ち明ける必要がある時、どのくらいあなたに打ち明けてきますか？	.34	.71
M20. あなたと一緒にいる時、配偶者はどのくらいリラックスしていると思いますか？	.42	.69
M18. 配偶者が深刻な問題を抱えている時、あなたにどのくらい頼ってきますか？	.35	.68
<b>固有値</b>	<b>4.31</b>	<b>3.88</b>
<b><math>\alpha</math> 係数</b>	<b>.92</b>	<b>.89</b>

n=310

[Abstract]

Reconsidering Family Work : The Effect on Emotion Work on  
Perceptions of Marital Quality

—As seen in Japanese couples data of the MIDUS study of Midlife in the U.S.—

Akiko HIRAGA

In an effort to better understand the relationship between the division of labor in the family and perceptions of marital quality, this study expands the concept of family work to include emotion work as well as housework and child care. Survey data from 155 middle-aged couples are used to evaluate the relative efforts of respondent's performance of housework and spouse's emotion work and respondents' performance of emotion work on spouses' perceived marital satisfaction respectively. A subsample of married couples with children is also examined, including a measure of spouses' child care tasks respectively. Results indicate that spouses' emotion work and respondents' performance of emotion work, as compared to the performance of both housework and child care tasks, is found to have the strongest positive effect on spouses' marital satisfaction. Findings also show that wives' performance of housework is negatively related to feelings of their marital satisfaction. It is suggested that the provision of emotional support be conceptualized as a facet of family work and incorporated into measures of this concept.

---

Key Words : Marital Satisfaction, Emotion Work, Middle-aged Couples

